OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本デザイン学会編集『デザイン事典』
Author(s)	豊原, 正智
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 178-179
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53249
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本デザイン学会編集
『デザイン事典』

朝倉書店　2003年　736ページ

豊原正智／大阪芸術大学

「事典」というものは，時がたてば増補，改訂等をしながら時代の変化に対応して行くという方法をとるが，デザインの分野において，『新版デザインハンドブック』からさすがに30年以上経ち，全く新しい『デザイン事典』が刊行されたのは，21世紀を迎えたこともあるが，待望久しいという感じがする。現在の技術の発展や社会情勢の変化を見ると，もはや30年前とは連続しない別な時代への移行のような気がするといったら言い過ぎであろうか。

80年代に入り，急速にパソコンが普及しはじめ，今日ではもはや特別な専門家のツールではなく，まさしくパーソナルな一つの電化製品となりつつある。IT（情報技術）という言葉が日常化して久しいが，その中核をなすデジタル・テクノロジーはわれわれの生活環境の隅々まで浸透し，これまでにはない新しい生活の機能やスタイルを提案している。一方で産業の発展に伴う地球温暖化など環境問題は深刻化しており，国際会議が頻繁に開かれなければならなくなっている。また，90年代には，ソ連の解体，東西ドイツの統一などによる冷戦構造が崩壊し，そのことが世界的な融和への希望をもたらす一方で，地域紛争や民族の対立を逆に生み出し，新たな貧困や難民問題を抱えることになった。このような状況はもはや一国や一地域だけで解決することは不可能であり，富の分配に関する先進国の役割は極めて大きいといわなければならない。全地球的な視点や「グローバリゼーション」が叫ばれる理由である。

われわれの具体的な生活の豊かな実現を目指すデザインもまたそのような視点から免れることはできない。ここ数十年のこのような技術的，社会的状況の急速な変化は，まさしく「デザイン」という領域にとって新たな思考の転換を含む課題を突き付けられているといってもよい。そのことは，大学でのデザイン教育の場においても，学科の専攻やコースの名称の変更に現れており，従来の「グラフィック」，「インテリア」，「プロダクト」，「インダストリアル」に加えて，あるいは代わって，「情報」，「映像」，「スペース」，「環境」，「ライフ」といった言葉を冠したものが増えてきているように思う。

世紀の転換期にあって，困難ではあるが「21世紀に求められるデザインの全容を新たな視点からまとめたい」（序）という要請に応えようとするこの『事典』の意義は少なくない。その構成はまさしくこのような状況に対応すべく，新たな枠組みから5つの部門に分けて編成され，さらに4から8の項目の分かれ，本学会員を含む234名の専門家による執筆がなされている。5つの部門は以下の通りである。

1．デザインの流れ・広がり
2．デザインと生活・社会
3．デザインの科学と方法
4．デザインと法律・制度
5．デザインと経営

1．では，デザインの理念と歴史が議論され，カラー図版と解説によって，道具，空間，伝達の3分野の「20世紀デザインの名作たち」

がとりあげられている。この「名作たち」の写真は，端的に戦後デザインの流れと現代デザインの状況を一望できて面白い。それらは広い意味で今日のグッドデザインである。宮内氏はそれらの「名作たち」が「日常生活の用を果たすだけでなく，美的なものとして享受されている事実を示すのがねらいである」と述べるが，まさしくデザインの本質であろう。戦後美術の中で「聖」と「俗」，「高級」と「低級」の区別がなくなって久しいが，その美術とデザインの区別も明確ではなくなっている。特に橋梁のデザインや「ストリートファニチュア」，空間や光のデザインを見るとき，あるいはコンピュータ・グラフィックスによる伝達デザインを見るとき，われわれは一方で「生活の用」を意識しながらも，大いに「自由な美」を感じ取っているのではないか。それらの融合から豊かな生活のヴィジョンを提示しているもの，それが「名作たち」なのであろう。

2．では，「あるべき人間生活」という極めて本質的なデザインの枠組みの下に，「環境」，「エコロジー」，「福祉」といった現代のキーワードをデザインの問題に取り込んでいる。特に福祉や高齢化社会に伴う「生活の質」の問題は21世紀の切実な課題である。

3．では，これもまた，デザインを従来のように「芸術と技術の中間領域」に位置づけるのではなく，「あらゆる科学の融合した」学際領域としてとらえ，「デザインの科学としての体系の再編」を試みようとする。「記号論」や「感性論」，あるいは「ニューラルネットワーク」，「ファジィ論」などはまさしくそれらの学問自体が「学際的」なのであり，そのような方法論が現代の科学としてのデザインに要請されているということであろう。

4．および5．に見られる法律や制度，あるいは経営の問題が独立した部門として「デザイン事典」に組まれているのもやはり現代を映している。これは最近のことであるが，企業内技術者の発明の対価の問題にみられるような権利意識や知的財産権の問題，公害，事故などに伴う賠償責任の問題等は世界的に注目されており，企業は過剰なほど敏感になっている。また古くて新しい産学共同や大学などを含むベンチャービジネスなど，今日ではデザインにとっても避けて通れない問題がとりあげられている。これらの問題は当然，行政との関わりの中で，あるいはデザイン教育にも取り込まれなければならない問題であろう。

いうまでもなく，「事典」というものは「辞典」とは異なり，言葉の知識を得るものではなく，むしろ「読む」ことで事柄を理解し，問題の在り処を掴み，一定のパースペクティブを得るものであろう。従って「網羅的」になるが，しかしそこから次の個別的，専門的な「深化」が始まるのである。それは個別の専門書にゆだねられるのであり，そこへ辿っていける「専門書」として，この『デザイン事典』を大いに利用したい。